慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「近世資本主義論」第二版序文緒論に於けるゾムバルト
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.7 (1924. 7) ,p.1037(127)- 1050(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240701-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慮すれば足る。「勞働は啻に技藝の所產たる繪畫・塑像・彫刻等に止らず、他の幾多の貨物に關しても價値の唯一の源泉である。其勞働を或は增し或は減ずる程度に於てのみ、素材の分量は是等諸物の價値に入る。斯くして何人かゞ土砂を混合せる黃金は何故土砂よりも價高きかと問ふ者あらば、彼は土砂を囊中に盛るには半時間にて易々たれども、黃金を囊中に充滿せんと欲すれば此土砂の含有する甚だ少許の金粒を採集する爲、幾多の歲月を要する事を須く記憶しなければならぬ。而して勞働を測定するには三條の注意を要す。勞働人員、勞働時間、及び各種勞働者の賃銀の異同是れである」（Ibid. pp. 289-290）。畢竟縷述の如く價値の據つて立つ諸原理を考察し來りて、吾人は其確定恒常普遍にして且つ現世の事物の秩序の上に其基礎を有する事を發見したるが故に、吾人の之を決定するや決して獨斷偶然にあらず、總て秩序有り階調あり且つ必然的なるを知る。價値は變動す。されど氣まぐれにあらず。其變動其物が整然精確不易の規律に準據するものである。そは觀念的である。乍併吾人の觀念其物が欲求と快樂の上に、換言すれば人間の內的心意の上に根據を有するものなるに依り、公正と鞏固を兼備す」と云ふのである（Ibid. P. 294）。

吾人は Davanzati に啓示を享けたる證跡歷然たる Galiani が毫も先覺の聰明を賞揚するの意志無く、其獨創の卓見を頌へずして其未熟の構想を嗤笑し、自ら獨り高しと爲せる倨傲の態度には寧ろ顰蹙を禁ずる能はざるものあれども、然も彼れに於て漠然朦朧たりし觀念が此れに於て顯然明瞭なる學說に進み、效用と稀少性とを摘出對立せしめて唯其間の架橋連鎖を後人の思索に委ねたる Galiani の功績は、之を認むるに吝ならざるものである。Angelo Bertolini は曰く「Galiani の學理的體系は當時一般に受容せられたる Locke 並に Cantillon のそれと毫末も共通する所無し。そは Jevons 並に Menger の學說を豫想す」と（Palgrave's Dictionary of Political Economy, Vol. II. p. 178）。此主觀的傾向顯著なる價値概念は軈て透徹せる Turgot の思辨を通じて佛蘭西に移植せられ、正系 Physiocrates の客覺的價値論を鎭壓して爾後の歸嚮を決定す可き緣由とはなつたのである。（未完）

「近世資本主義論」第二版序文緖論に於けるゾムバルト。

高木壽一

ゾムバルトが本書の第一版より十五年の後に第二版を出したる時、此兩者が如何なる相異を示せるかを知らんがため には先づ著者自らの示す所に聞かざるべからず。之がために筆者は第二版の序文緖論の概要を摘記したり。筆者が本文を草したるは大正十一年春のことなれども今或必要に促がされて此稿を茲に示すの機會を得ることゝなれり、

一

ゾムバルトが序文の劈頭に於て云へるが如くば、此「近世資本主義論」第二版が舊版に對し全然別個の新著なるとは內容目次を一見する者の明に認むる所なるべく其舊著より採れる所僅に十分ノ一を出でず、而も之等の小部分すら尙全然新なる思索解釋によりて配置せらる。本書に於て同一表題を承揭するも、こは此書が任として研究する根本問題と其根本的思想の系統とが尙、同一なるを示さんとするものに外ならず。其他の點に於て本書は內容に於て全く新著なりと。

而して、本書第二版が舊版に對して示す相異に就きて特に左の諸點を列擧せり。

一、新版は其資料の點に就き著しく增大せり。舊版は僅に歷史的發達の一部を述べしに過ぎざりしに反し、新版に於ては、ヨーロッパ各國民の全經濟的發達の叙述を與へんことを期せり。斯くて敍途をカロリンゲン王朝時代に起し、特に初期資本主義の時代即ち第十六、十七、十八世紀に就き詳細なる說明を與へ、更に現代に及ばんとす。各卷に對する資料の分配も等しく別個のものとなれり。第一卷は諸概念に關する基本的緒論並に資本主義前の經濟及近世資本主義の歷史的基礎の敍述を包含し、第二卷は全然新に書かれたる所にして、初期資本主義の時代に於ける經濟生活の敍述に當る。未刊の第三卷は資本主義隆盛期の時代に於ける資本主義の完成を記述することゝなるべし。

二。本書第二版は其結構の上より見るも、第一版より其構造に夥しく、錯雜の度を增加したるによりて異る。而もこは亦、必ずや、冗重、晦澁の度を更に大ならしむとの非難を齎らし、或特殊の問題に關して立てし判斷により、全卷を顧みるの勞を惜める幾多の輕卒不熟なる批評を受くることゝなるべし。

從來行へる資本主義的發達の部分的問題に關する諸著の目的とする所は、斯る個々の探究により暫く專ら之等の部分的問題の研究に沒頭するの要あるを以て、研究者の觀察を問題の一面に集中せしめんとするに他ならざりしなり。今や、個々の糸を一布に編み、多くの勞を近世資本主義の構成に費せり。

三。研究方法に就きて、第二版は、第一版の最大の缺點を能ふ限り避けんとせり。即ち理論的觀察方法並に經驗的實在的觀察方法の許すべからざる混淆之なり。而も此點に關しては Max Weber の外之を指摘せるものなく、特に斯る缺點は手工業的經濟の敍述に於て著しかりしが如し。

第二版に於ては各個の問題の研究に際し、專ら理論的方面及經驗的方面の區別に努め、全卷を通じて、此二重觀察を嚴に行へり。

而して、此研究方法の更新に對して、ゾムバルトは大なる意義を附し、方法論に關して經濟學に貢獻する所あるを期せり。(Geleitwort SS. 9-12)

二

次いて本書並に著者ゾムバルトが國民經濟學の諸學派或は諸研究方法 (Richtungen oder Schulen oder Methoden der National ökonomie) に對する地位に及びて謂ふ。

今も尙、經濟學の學派を分つに抽象的理論學派と經驗的歷史學派の餘を知らざる者にとりては本書は不可解のものなるべし。而も新路を進まんとする現象は現代の各社會科學的研究に悉く之を適用し得べく、斯くて歷史的國民經濟學並に抽象的國民經濟學との間の對立も總べて其意義及其重要なる所以を失ひ又少くとも失ふべきものなることは敢て怪しむに足らざるなり。

尙、或は理論的經濟學派の小壯學徒にして歷史派によりて代表せらるる研究原理に自覺的反對の立場に立つものありとせんか、こは悉く、或傳統によりてのみ律せられ、所謂古典學派によりて立てられたる概念要式 Begriffschematik 及其概念要式により隔離的研究方法に從て立てられし諸現象の合法性(正しき思索行程)の確保と擴張に關する所の、諸問題の或限られたる全部分の擁護のために故意に理論なる概念を制限せんとするに基くなり。

而して何人も所謂理論殊に抽象的隔離的研究方法の價値を本著者より高く評價するを得ざる

べく、本書中多くの點に於て此研究方法は採用せられたり。

遮莫、國民經濟學なる經濟生活に關する此社會科學の本質並に內容を以上の抽象、隔離の方法に甚くと誤信し、或は唯斯る構成の試みが宛も經濟學の獨立に觀察すべき部分なりと信ずるが如きも、斷じて許すべからざる事なり。

理論と經驗との結合が、初めて科學的國民經濟學の全業を成就すべきは明なる所にして、純理と經驗論とが、同一對象の形態と內容の如くに、相互に相關係すと云はんは殆ど陳腐の事に屬すべし。斯る觀念は既に古き所謂歷史學派の先達によりて代表せられ、今日に於ても亦、現代の總べての研究者に於ける支配的觀念なり。本書も亦、理論的にして且つ歷史的なり。

現代に於ける研究傾向の特徵として人は、他の科學に於けると等しく、社會科學に於ても亦、理論的問題の顯著となれるを擧げ、直ちに理論的欲求の復興となすは誤りたるものに非ざるべきも、而も唯經濟學に關する限りに於ては「理論」なる語を上述の如き狹き意味に解すべからず。理論の復興が國民經濟學に新機運及進步を意味すとするも、そは抽象的研究方法を高唱する者に據らず。リカードオの方式の擴張或は以上の概念要式の維持及擴張に於て經濟學の業を認むる者と雖も有益なる研究をなし得べきは疑なきも、而もそは改革者に非ずして單に亞流たるに過ぎざるなり。

現代の理論の復興を哲學復興と一致するものと云はんは全く別個の意義を有す。現代は以前よりも現象の意義（Sinn）及び認識の意義に關して研究せらるることの多き點に於て、哲學的となれるも、而も概念の正確及び資料の組織的研究、就中個々の知識の綜合に對して從來よりも大なる價値の認めらるる點に於て特殊科學も社會科學も亦理論的となれり。實に斯る、散亂せる研究結果の綜合的概括の要求に於て、吾人は正しく現代の特徵を認むるを得べきなり。

斯くて斷えず增加し行く資料の活用を秩序的組織的分類を以て行はんがために、概念並に組織の構成に專心せり。

而して本書の如きは、五十年前のマンチェスター派の經濟學徒の云へる國民經濟學に同じからず。元より、ゾムバルトはマンチェスター派に於けるが如き商業實務的經濟學の有用なる所以を疑ふものに非ずと雖も、尙同時に、歷史的哲學的基礎によらざれば不可能なる事象を人間社會的存在の大なる關係に於て律するを以て其任とする。經濟學の眞の中心たる學の存在すべきを信ずるなり（Geleitwort SS. 12-15）

三

ゾムバルトは次いで本著が決して或政治的又は經濟政策的、或は社會政策的黨派に貢獻せんとするものに非ざるとを述べたる後、彼が歷史研究並に歷史家に對して採れる立場に及べり。

「近世資本主義論」第一版は夙に、ツンフト的史家の間には、劣惡の書たるの定評あり。而も、第一版の有せし缺點の大部分は第二版に於ては除去せられたりと信ずると共に、彼は又第一版に對する歷史家の批判が悉く妥當なりと認むる者にあらず。殊に彼の著書に於けるが如き歷史說明の方法、即、其研究方法の構成、概括を不當なりとする多數史家の見解に對して次の如く主張し得べしとなす。曰く、歷史に問ふを得べき二事は嘗て一度發生せる事項並に反覆繰返されし事項の孰れかなるべし。前者は其事件の單一なりしの故を以て特殊歷史的問題とし、後者は、其反覆せられしの故を以て、社會學的問題

と稱するは、共に正當にして總べての史書は此兩問題に資せんとするものなり。元より觀察の對象に應じて、一の他に優れることあるべく、傳記と狀態史（zustandsgeschichte）とは其兩極端を示すものなり。

此兩個の問題は經濟史に於ても亦、正に存在するも、一を採りて他を捨つることなく、唯兩者を俱に等しく採るべきなり。特殊の事項の眞價を特に明ならしめんがためにも經濟史は單に補助としてのみならず、眞に基礎として歷史的社會學的研究を必要とするものなるを强調せざるべからず。斯くて如何なる現象が一般的なるや、即ち反覆繰返さるるやを決定したる時、初めて吾人は吾人によりて考察せられたる部分的問題の特殊性の奈邊にありやを確言するを得べきなり。本著の特徵は實に經濟的現象の普遍性に對する問題を極端と認めらるべき範圍にまで擴張せる點に存するなり。

而して本書に於ける研究の限界は、西部南部ヨーロッパ國民によりて立てられたる文化的範圍にして、又其觀察の範圍より見れば特殊歷史的問題なり。即ち單に「近世」資本主義史にして、資本主義史にあらざるなり。而して斯る限界の中に於て、各國民の特殊性は暫く措き、先づ近世資本主義の成立を齎らせる孰れの經濟的現象が全歐國民を通ずる一般的のものなるやに就きて考察せんとす。此ヨーロッパ一般の經濟的發達の特質の確定は更に小なる範圍の經濟的事象を考察して多大の效果を擧げんがために、又必須の前提たるべきものなり。吾人はヨーロッパ經濟史の如何なるものなるやを知りて後初めて歐洲各國の經濟史を記述し得べきなり。數學者が $ab+ac+ad$ を $a(b+c+d)$ となす如く其各々はヨーロッパ的並に各國民的本質よりの產物たる全歐洲經濟史よりヨーロッパ的基調を抽出し、其本來の狀態を研究せんとす。如何なる歷史家も熟慮の後斯る研究方法を、狹義に於ける歷史研究と共に其正しきを認めざるを得ざるべし。

而して又問題の解決のためには、一の科學的裝置を必要とす、即ち經濟生活に關する組織的科學の極めて精緻なる要式 Schematik 之なり。唯、全科學資料の根本的理論的考究のみ克く諸現象の全般的關係を明ならしむるを得るのみにして、近世資本主義成立史は、就中、現代の經濟生活を熟知し且つ理論に秀でたる經濟學者のみの記し得べき所なり。而もこは概ね、特に古き歷史家の間に於て未だ行はれざる見解なり。斯る史家は既に半ば過去のものに屬すと云ふべきなり。

ゾムバルトは將來彼の如き研究が、歷史家の間に無益、誤謬の企畫たらずして彼等自らの狹義に於ける歷史研究の必須の補充なりとせらるるに到るべきを確信するものなり。（SS. 16-19）

而して、ゾムバルトは從來、彼の引證方法に加へられたる幾多の批判に答へ、本著第二版が更に多くの批難を受くべきを豫期し、最後に、科學に於て批判の盛なる所に生命の本源の出づることの稀にして、又他の如何なる批判も、精神に生くるものを絕滅し能はざるものなることは、些か安ずるに足る意識なりとの言を以て其序文を結べり。（Geleitwort: SS. 19-22）

四

斯くて、諸概念に關する基本的緒論に入り、第一章「經濟生活の基本的事實」の題下に、先づ「生存維持行爲 Unterhaltsfürsorge」「技術」を論じ「勞働と勞働組織」に及べり。

人類の目的行爲の中其目的の內在と外在によ

りて遊戯と勞働を分類し總べての人間勞働は社會的勞働にして、又其故を以て、一定の秩序の下に立ち、其秩序に於て計畫は客觀化せらる。此人間勞働の秩序を目して勞働の組織とし、勞働組織には分業、及協業なる唯二個の原則の存するのみにして、人間勞働を一定の方法に律すべき他の總べての途は單に此兩者の亞種たるに過ぎずとなす。(Einleitung S 8)

而して分業 Spezialisation とは同一勞働者に繼續的に、同一、反覆の作業を課する配置方法を云ひ、分業の程度は極めて多樣なり。勞働者が繼續的に行ふ部分作業が、以前合一なりし、又は合一なりと認められ居りし總勞働行程の、水平的分裂或は垂直的分裂の孰れによりて生せるとも根本に於ては同一なり。分業が經營 Betrieb 間に生ぜると、經營內部に生ぜると、結局、分業の概念に對して何等の異る所なきなり。(S. 10)

協業 Coop'ration は、消費的利用により又は目的によりてのみ自ら決定せられ得べき、一の總作業に對する多數者の協力 mitwirkung にして、勞働の特化が行はれずとも尙ほ存在し得べく、又勞働が分業化せらるゝ場合には必ず存在せざるべからず。即、協業は部分勞働の必須の結合を形成するものなり。協業と分業とは集化と分化の關係と相同じき相互關係に立つものなり。

人間勞働を合理的行爲の發現として見る時、多數多樣の個々の行爲が一の特殊の勞働計畫に從屬せるによりて、內部的に結合せる一單位に結合するを見る。高き程度の一の總體に對する繼續的團結を經營と云ふ。更に正確に、經營を以て、繼續的作業の目的に對する施設なりと云ふを得べし。(S. 10)

一人が單獨に勞働を營む場合には自己の作業を以て經營を形成し純主觀的計畫によりて行ふも、多數者が共同の作業 (wirken) に結合するや一の秩序に客觀化せられざるべからず。茲に於て、各個の行爲が總勞働に於て秩序的に遂行せらるるが爲に、常に經營組織 (Betriebordnung) を生ず。而して經營組織の全業は、時と所に對する適當なる分配による各個の生產要素の合目的結合にありと云ふを得べし。こは次の諸點に於て表はる、即、勞働行程の開始(Einleitung der Arbeitsprozesses)勞働行程の形成 (Gestaltung) 勞働行程の遂行(Ausführung)等之なり。(S. 11)

又經營單位は經營組織 (Betriebsordnung) に於て認むべく、經營單位の遂行する事は、具體的事實に基礎を置く(客觀的又は作業單位)か或は作業者の自由意思的目的(主觀的又は目的單位)より生ずるかの孰れかなるべし。目的は同一勞働圈內に於て多樣なるを得べし。

而して、こは、作業者の目的と作業の目的とが常に一致せざる資本主義經濟に於て根本的重要なる區別なり。

嘗て、ゾムバルトは作業者の目的によりて形成せられたる單位を經濟とし、作業の目的によりて形成せられたる單位を經營とし、前者を價値增殖團體 Verwertungsgemeinschaft 後者を作業團體 Werkgemeinschaft として表示したれども、(近世資本主義論第一版緒論六—七頁)今や、經營 Betrieb なる一の上位概念を構成し、此上位概念の下に、經濟(或は價値增殖)經營 Wirtschafts (oder Verwertungs) Betrieb と、作業經營 Werkbetrieb を分つを更により適當たるべしとなせり。(S. 12)

經營の諸形態に關しては、一定の特徵として生產要素の特殊組織を抽出せし時、及、就中個々の勞働者の總行程並に總生產物に對する關係

を明瞭ならしむることによりて、最も明に其特質に就きて理解し得べきなりとし、更に第一版に於けると同一文を繰返せり。

作業者が其仕事に對する關係は根本に於て、二にして、作業並に生産物が本質的に同一個人に屬するか、又は作業及生産物が共同的なるかの孰れかなり。斯くて經營は個人的經營及社會的經營の二類に分れ、生産物は一人の勞働者の所産として又は總多數勞働者の所産として、現はるるなり。（第一版二六頁、第二版十二頁）

而して、個人的經營形態並に社會的經營形態に關する審かなる說明は之を本著第一版二六——四九頁に讓り、第二版に於ては唯單獨經營、助手經營。小、中、大經營。マニュファクツール。工場經營等の諸名稱を擧ぐるのみにて多くの說明を加へざるなり。以上、經營（作業經營）の諸形態に對して、經濟經營の採る個々の形態を經濟形態と稱せり。（S. 13）

而して經濟生活の行はる諸形態を生ずべき基本的事實として、第一に經濟主義 Wirtschafts-prinzipenを擧げ需要額充足主義 Bedarfsdeckungs-prinzip 及營利主義の二に分ち、更に經濟主義は經濟的行動 Wirtschaftsführung の相異により傳統的 traditionalisch 又は合理的 rationalistisch となるべしとなせり。第二に技術 Technik を擧げ、第三を經濟組織となす。此第三の經濟組織の經濟生活に對する點に關しては、第一版五一頁五二頁に於けると同一文を再說して生産に對して必須の要素即ち生産資料と勞働力が生産行爲に參加する手段方法、生産に參加する者が生産の形成及經過に影響を與ふる方法、生産物の處分せらるゝ方法、生産參加者の生産收益（produktionsertrag）に對する關係を擧げ更に經營形態並に經濟形態を列擧せり。又、經濟生活の各特殊狀態は一定條件の實現に據り、即、換言せば特定の經濟生活は多數の精神的、及物質的。或は自然的及人爲的、既定條件の上に建設せられしものなり。一定の經濟生活の成立にとりて便或は妨碍となる諸條件に關しては、其種類によりて、自然的條件及文化的條件となし、文化的條件を更に、客觀的文化（有形的文化、無形的文化——制度的文化、精神的文化）。個人的文化（肉體的文化、精神的文化）總文化現象（或は文化形式）等に分類せり。（SS. 14-19）

五

現代に於ける國民經濟學の對象に關して、ゾムバルトは、其對象は消極的には法學及諸文化學によりて研究せられざる範圍に於ける、人間生存維持行爲 menschliche Unterhaltsfürsorge なりと云ふべく、是を積極的には、國民經濟學は經濟組織 Wirtschafts system に關する學なりとなせり。（S. 21）

而して、人間生存維持の行爲は一の社會的現象なるが故に經濟學は社會科學にして、其諸概念は總べて社會科學的特徵を有せざるべからず。國民經濟學が歷史的社會科學なることは其先天性（a priori）にして、國民經濟學の概念は總べて歷史的範疇なり。之に對して、經濟的範疇として對立せしむる所のものは、社會科學的概念に非ずして技術的概念 technologische Begriff なり。こは單に補助概念としてのみ認容せらるべきなり。（S. 21）

國民經濟學の嚮導的概念は經濟組織の概念なり。經濟組織を以て、一定の性質を具有する經濟方法即ち其內部に於て一定の經濟心 Wirtschafts-Gesinnung 支配し、一定の技術の用ひらるゝ經濟生活の一定の組織を解す。經濟組織の概念に於て、經濟生活の歷史的に限定せられたる特

質は一の概念的單位に概括せられ、總べて他の國民經濟學の諸概念は此上位又は基本的概念によつて律せらるるなり。

而して、科學的研究方法として理論的研究方法即ち總べての現象並に其關係の抽象的理解、並に實在的經驗的研究方法、即ち經濟生活の實際的狀態並に其推移の理論的認識の補助による確定を擧げ、此研究方法に於て經濟組織の概念に應ずる概念を經濟時代 Wirtschaftsepoche 即、一定の經濟組織に適合せる經濟方法の優越なる歷史的時期となす。第三の研究方法を政策的研究方法とし、緒論の最後の一章に到りて本著の研究題目に就きて更に述ぶる所あり。（S. 22）

以上の原理に從ひて、本著は其起源より現代に到るまでのヨーロッパ諸國民の經濟生活を發生的組織的（genetisch-systematisch）に敍述せんとするものなり。

而して研究の範圍並に經濟的現象の普遍的事實を多く論ぜる點に關して序文十七——十八頁に於ける彼の研究方法に就きて述べたると同一事を反覆し、彼の謂へる發生的組織的說明は即ち、經濟生活の各個の現象は其當時の支配的經濟組織によつて律せらるることを意味するとなせり。經濟組織の概念並に經濟時代の概念は能く、廣汎なる資料の統制に資し、又こは此兩概念の援助によりてのみ可能となるなり。

紀元八〇〇——一九〇〇年間の十一世紀間に行はれたる經濟組織を以て、(1)農民及土地貴族の二重の狀態に於ける自足經濟 Eigenwirtschaft。(2)手工業經濟 Handwerk (3)資本主義の三となし、此三經濟組織は又、三個の經濟時代に當り、此各時代に於ける經濟生活の眞相を明にするは本著の主題とする所にして又ゾムバルトは Cunningham: Levasseur; Inama-Sternegg: Kowalewsky 等の著の經濟史は、其本質に於て法制史に外ならざるものと認むるなり。（S. 23）

尙同時に一定の時代を支配し、其時代の經濟生活が形成せらるる、精神を發見し、其眞相を明ならしむるに努めたり。各時代に對しては、各經濟心支配し、そは其精神に適する形態を與へ、經濟組織を形成する Geist なることは本書並に本著者の全敍述の根本的觀念なり。（S. 24）

而も精神は地上に於て全能のものにあらず。其精神に應じて其生活を形成すると共に又一定の條件は滿されざるべからず。本著の大部分は經濟的觀念（Wirtschatlich Idee）の實現に必須なる諸條件に關する敍述に當てらる。而して經濟生活の狀態は其他の總べての文化狀態によりて決定せらるるを以て經濟生活の諸條件の說明は政治的、精神的生活の全班に入る。一定經濟方法の諸條件を手工業經濟に於ては組織的に、資本主義の場合には發生的に說明し、後者を本著の主要部分となせり。（S. 25）

斯る研究に於て、自ら諸事象の歷史的變遷の一定の區節、節成（Gliederung）を生じ、經驗上限定せられたる期間に於て一の經濟主義並に之に適する經濟方法の權力の殆と無制限なるを見るべく、又他の時代には支配經濟組織の下に新經濟主義が自己の承認を求めつゝあるを認むべし。換言すれば新經濟主義は先づ既存の經濟組織の內に於て完成するに努め、其實現の爲めに漸次に經濟形態を創造するも、其經濟形態の狀態は、根本的には當時の支配的經濟主義によりて產出せられし經濟秩序（Wirtschaftsordnung）の特性によりて決定せられ、唯徐々に其精神に從て、全經濟生活を形成するなり。新經濟組織より見る時は、新經濟主義が舊經濟組織の下に於て努力せる時代は、初期 Frühepoche にして、

舊經濟組織より見れば晩期 Spätepoche なり。初期と晩期の間に、一經濟組織のみの精神が全發展を遂げたる隆盛期 Hochepoche は介在す。(S. 25-26. 第一版 S. 71)

而してゾムバルトは資本主義的經濟組織に於ける中心的動力にして、企業精神 Unternehmungs-Geist 及市民的精神 Bürgergeist より成れる資本主義的精神に就きては、本著に於て多くを論ずることなくして、其總べてを彼の別著 Der Bourgeois に讓れり。(S. 329)（完）

科學的社會主義は如何にして可能なりや（上）

平井新

本稿は Eduard Bernstein の著 Wie ist Wissenschaftlicher Sozialismus möglich? の翻譯である。本書は其著 [illegible] 諸文獻の中で最も [illegible] 文獻の [illegible]

約二十數年前即一九〇一年五月十一日ベルンシュタインが伯林社會科學研究會の席上述べた講演に多少の補正を加へて同年五月二十九日約五十頁の小冊子として公刊せしものである。本書は斯かる小著たるに拘らず、かのマルキシズム全體系に根本的斧鉞を加へた名著 „Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie." と共に „Revisionismus" の二大寶典として既にマルキシズムに關する歴史的古典的文献に屬するものである其立論の堂々、論理の明徹、批評の剴切犀利なる流石に匠匠の面影を躍如たらしむるものがある。乍去惜むらくは譯者の貧しき語學力のために原書の高雅なる氣品を傳え得ざりし事である。誤譯、誤字等、恐らく貧しき譯者の免かれぬ所であらう。願くば大方讀者の御教示を待つのみである。因に原著の脚註は飜譯の便宜上省略した。此點御諒承を乞ふ。

現今普及せる社會主義諸學説中、就中最大の勢力を有するもの即ちカルル・マルクス及びフリードリッヒ・エンゲルスに依つて完成せられた學説體系――今日各國多數の闘爭的社會主義者にして、天分の甚だ豊なる J. B. V. Schwitzer は、マルクスの主著『資本論』公刊の際、其讀後の所感を述べて謂ふ『社會主義は一個の科學である』と。

遮莫マルクス派社會主義――姑く此略稱を用ふれば――は自ら『科學的』と呼號した唯一の又は最初の社會主義學説ではない。佛蘭西の社會主義者ブルドンの一派ほど『科學』なる文字を振り廻はしたものはないとはマルクスさへも『資本論』の第一章脚註第二十四に書いてゐる。乍去ブルドンはマルクスが『資本論』を著した當時に於いて、羅甸民族社會主義者中最も深き感化を與へてゐた。試みに諸君がブルドン以前に現はれた佛蘭西の二派の社會主義者即ちフリエー並にサン・シモンの學派を覗ひ更に轉じて、英國に移り、ロバアト・オウエン學派の著作を繙くならば、諸君は屢〻彼等が一樣に『科學』なる名稱